

2日目トーク① 浜野佐知氏・山崎邦紀氏（聞き手：加藤りょう）

加藤：お時間になりましたので、トークの方を始めさせていただきたいと思います。皆さん、『川奈まり子 牝猫義母』はいかがでしたでしょうか。これから浜野佐知(はまのさち)監督と山崎邦紀(やまざきくにのり)さんをお迎えして、本作についてお話を伺っていききたいと思います。

まず、浜野監督と山崎さんのご経歴についてご説明させていただきたいと思います。浜野佐知監督は、これまで大手映画会社の監督の採用条件が大卒男子に限られていた時代にあって、女性でありながらピンク映画を300本超も撮影してきた監督でいらっしゃいます。

それから山崎邦紀さんは、浜野監督の今回の作品『牝猫義母』の脚本を担当されていて、その他にも浜野監督と共同で制作プロダクションの旦々舎を設立して、タッグを組んでいるという方です。ご自身でもピンク映画、薔薇族映画を監督していらっしゃいます。

この時間では先ほどご覧いただいた『牝猫義母』についてのトークをさせていただきたいと思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

浜野・山崎：よろしくお願いします。

浜野：間違いがひとつあって。300本というのは、私が210本か220本ぐらいで、山崎監督が100本近くあるものね。私と山崎監督が作った全部の製作本数が300本を超えるということです。

加藤：あっごめんなさい。そうだったんですね。それでも200本超も作られて。

浜野：私個人ではね。

加藤：トークに入る前にちょっと説明させていただきたいことがありまして、今回上映させていただいた映画の題名が『けもの道 義母と間男』になっていたんですけれども、これはピンク映画でよくある改題でして、もともとは『川奈まり子 牝猫義母』で制作されています。ピンク映画では名前を変えて昔の作品が上映されるということが結構ありました。ロビーの方では新しい名前のポスターと古い名前のポスター両方とも掲示してあるので見てみてください。

それでは本日はどうぞよろしくお願いいたします。

最初にお聞きしたいんですけど、久々に『牝猫義母』をご覧ください改めてどうでしたでしょうか。

浜野：改めてというか、この本町館さんが世界で一番私のピンク映画を上映してくれている映画館だということなんですけれども、それはなぜかということ、私は昨日どなたかのお話〔1日目での菅野先生のトークを参照〕でロマンポルノは芸術だというようなお話があったけれども、私はピンク映画を芸術だなんて思ったことは一度もないんですよ。私は職業としてピンク映画をずっと撮ってきたわけです。

生きる生業の仕事として旦々舎を運営し、ピンク映画を作り続けてきたので、まずピンク映画とは何かということですよね。それはやはり観客がほとんど男性ではあるんですけれども、その男性の性的ファンタジーや男性の欲望をきちんと提示しながら、なおかつ女である私がピンク映画をどう撮っていくかというのが私のテーマだったわけです。

ですからプロとして、職業としてのピンク映画で、きちんと派手な、多分他の男の監督が絶対に撮らないような、ああいう派手な絡み、それからやっぱり男の目が欲情するような女性の肉体の演出というか描き方でいながら、テーマとして女の監督として何を撮るか。

私はやっぱりそれこそ、大卒男子で普通の映画会社に入れずに、ピンク映画でしか映画の勉強ができず、助監督になれなかったんです。当時のピンクは本当に带クルクル、あ〜れ〜みたいな映画だったんですよ、本当に。とにかく突っ込めば喘ぐ、女はやっちまえば俺の女、俺のものみたいな、そういうことが本当に当たり前のように描かれていた。だったら私が女のピンク映画監督の第一号であるとしたら、何をやるかといったときに、私は自分の生涯のテーマを、女のセックスを女の手に取り戻すことだと思ったんですよ。

だから突っ込まれたって誰も感じねえよ、バカたれってことですよ。女のセックスはそういうものじゃない、肉体が、心とともに解放されていく。弾け飛んでいく。快楽に喜ぶ肉体。そういうものを女は持っているわけですよ。

ウーマンリブ（註1）の田中美津（註2）さんが「女は男の便所じゃない」と言ったけれども、便所どころの話じゃないわけですよ。女だって欲情する。女だって肉体の快感が欲しい。さらに、私の身体は私のものだという、男の観客に対して「あなたがたが思っている女っていうのはそういうもんじゃないよ」ということをテーマとして、ずっと撮ってきたということですよね。

加藤：ありがとうございます。確かに劇中でも川奈まり子さんが男からのセックスを拒んでいたりというシーンが結構あって、本当にその通りだなと思うんですけど、そういったフェミニズム的なテーマを持ちながらも、男性観客にとっても人気の監督であったわけですね。どういったところが男性の観客に、具体的に『牝猫義母』で言えば響いたと思いますか。

浜野：やっぱり絡みの見せ方ですね（笑）。それはもう、自信を持ってピンク映画界一のエグさを持っていると思っているから、私は（笑）。逆にピンク映画は男の監督ばかりじゃないですか。しかもいわゆる四天王とか七福神（註3）とか言われる若い監督なんていうのは、逆に変にすかしちゃってるわけですよ。ピンク映画は芸術だみたいなことを言い出すやつもいるし。

さらに、なんていうのかな、若い男の監督であるがゆえに、女性の体に対して遠慮があると思うんですよね、現場で。女性の体のことも女性の快感のこともよくわかってないっていう。そういう人たちに比べれば、女優さんと私っていうのは女同士だから遠慮もないし、しかも私の撮ろうとしていることに女優さんたちはやっぱり共感してくれるんですよ。

今回の映画の川奈まり子（註4）さんにしたって、あとの二人の女性たちにしても、やっぱりこういうテーマに共感してくれる。ピンク映画という男社会の中で、女優だからといって差別されてきている人たちはいるわけですね。当然のことながら。

私と会う前は「女ってこんなじゃねえよな」「こんなところで喘がねえよな」と思いながら演じてた人たちが、「そうだよね、監督、そうだよね」と言ってくれる。そのある意味シスターフッドみたいなものが、女優さんと私の関係の中にできた。だからこういうエグい画も撮らせてもらえる。

男の監督が「じゃあ大股開いて、Tバックで、ちょっと透けさせて」って言ったら、ふざけんなって話になるわけだけれども、私がこの映像を撮りたい、こういう派手な絡みを撮りたいという本音が女優さんたちにも伝わったから、こういう映像が撮れたんじゃないのかなと思うわけです。

私はやっぱり女の体は綺麗だと思ってるから、女の体っていうのは愛すべきものだと思っているので、決して撮るときに〔女優さんが〕嫌だということはしないし、美しく撮ろうというふうには思っていたので、そういう気持ちが伝わって、エグい絡みが成立したんじゃないのかなというふうには思いますね。

加藤：ありがとうございます。女性ならではの感覚と関係性というのが、男性が知り得ないところを表象でき、共感を得られたのかなと思います。

山崎さんはいかがでしたでしょうか？

山崎：いろんなパターンで見せ場があったと思いますが、絡みの撮り方の教科書みたいなところはまあ鼻につくっちゃ鼻につくんですけれど、面白く見せられたかなという気がします。

加藤：絡みについてちょっとお聞きしたいんですけれども、劇中のセックスでも、結構体と体が触れ合うということから、俳優さん同士の呼応とか演技じゃないところも含まれてくるのかなと思うんですけど、現場ではどういうふうに濡れ場を監督しているんですか。

浜野：濡れ場を監督って、当然カット割りがあるからね。全部カット、このシーンのこの絡みは20カット、30カットに、いわゆるアップだとか手だとか腰だとか、それ全部カット割りがあるんで、それはカット割りどおりに撮るんですよ。

やっぱりおっしゃるように、絡みってというのは体が密着するし、キスもするし、おっぱいも舐める。ですから初顔合わせで「こんにちは」って言うよりは、やっぱり親しい俳優さん同士のほうがうまくいくっていうことがあるので、ピンク映画っていうのはやっぱり「浜野組」っていったら浜野組の女優、浜野組の男優っていう、一つの一家みたいなものはできてるんですよ。だからお互いの信頼関係の中で絡みもやっていくっていうようなことじゃないのかな。

山崎：基本的にフィルムで撮ってたんですよ、ピンク映画は。フィルムの場合にモザイク入れるってのは非常にお金がかかるので、モザイク入れないで、どこまでぎりぎり限界を見せながらっていうプロの技術があるわけですね。その技術を持った女優さん男優さんが結集してるので（笑）、今日みたいなカットが撮れる。

加藤：ちなみに、脚本では濡れ場についてどの程度指定されているのですか。

山崎：絡みについては全然書いてません。セックスする、一行だけ（笑）。浜野組の場合どうしても絡みが多くなるので、とりあえず順列組み合わせで絡みを作っちゃったりすることもあるんですが、基本的には現場の演出っていうか、監督のカット割りで成立しています。

浜野：あのね、ピンク映画って決まってるんですよ、絡みの回数が。最低撮らなきゃいけないのが、主役が三回、あと脇の二人が最低一回ずつ。配給会社としては、それがもう一回ずつ増えたら嬉しいなっていう（笑）

それが決まっているので、その中でどういうふうなバラエティを持って、どういうテーマで絡みを見せていくかっていう感じでしたね。

山崎：ただその一回が浜野監督ほど長い監督はいないんじゃないかっていうね。

浜野：だってさっきのロマンポルノでもそうだけど、最後までイってないんだもんね。やっぱりね、最後までイかせろ。

〔会場一同笑う〕

浜野：前戯がすごく長いっていうので浜野組の絡みは有名なんだけれども、なんで前戯が長いかっていったら、やっぱり前戯できちっと一回女の人をイかせて、それからじゃないと挿れさせないっていう気持ちが私の中にあるんですよ。

ふざけんな、男の快樂のために奉仕するような女いねえよっていうつもりで撮ってるんで。まずはイかせろっていうそういうのを撮るからどうしても長くなっちゃう（笑）。

山崎：今日のもね、例えば後ろに鏡があって、鏡に男優のお尻が映っている場面があったんだけど、あれ誰に対するサービスなんだろう？〔会場一同笑う〕浜野作品にはああいう不思議なところもある。

浜野：不思議とか（笑）あれもあれでおもしろいじゃん。

山崎：面白いけど、誰に対するサービスなんだっていう（笑）。

加藤：私もその点を思っていて。『牝猫義母』ではそれほど思わなかったんですが、他の『和服姉妹』（註5）っていう作品で、女優の前に男優がいて、その男優のお尻がカメラの前面にすごく大きく映っているシーンがあって、男性の観客がたくさんいるピンク映画っていうジャンルの中で、こういった演出をなぜ誰に向けてしているんだろうっていうのは思いました。

浜野：誰にっていうか、別にセックスシーン撮るんだから男のお尻撮ったっていいと思う。ていうかね、私23歳でピンク映画の監督になったんですけど、初作品の男の主演が、国分二郎（註6）っていう役者だったんです。で、セックスしてるときに、

国分二郎のピストンしてるお尻を撮ろうとしたんですよ。そしたらその役者が怒っちゃってさ（笑）「男のケツなんか撮ってんじゃねー」つつってさ（笑）「誰が喜ぶんだ」って言われたけど、「いや私喜びますから。私が見たいんですよ」と揉めたことがあります。やっぱりセックスっていうのは、当然正常位にしるなんにしる、性器が結合して動くことなので、それをきちんと撮りたいなって気持ちはありますよね。

山崎：でもやっぱり男の役者は嫌がりますよね。自分のお尻を撮られるのと、あと、今日もあったんだけど、口で受けた精液を男の役者の胸と口に垂らしましたけど、あれを顔面に出すことは結構あって、あれは本当に役者は嫌がる。

浜野：浜野組名物「ザーメン返し」なんですよ。「必殺ザーメン返し」って言って、必ずやるんですけど、私。だってさ、出したものを返して当たり前じゃん、勝手に出してんじゃねえっていう感じでさ。それで出されたら、とにかく返す。

で、さっき胸に垂らしたやつは半分、ぬちゃぬちゃ塗りたくってさ（笑）。それで、あとは口の中に返して、さらに丁寧にキスまでして戻してあげるといふ。でもね、女優は喜ぶんですよ。「じゃあね、必殺ザーメン返しやるよ」って言ったら、「わーい」って。女の子はみんな喜ぶのに、男が絶対嫌がって。

特に長男やったなかみつくん（註7）っていうのが、もう本当に嫌がって。「必殺ザーメン返しやられるなら、僕、出演断ります」なんていうぐらい、嫌がる人もいますね。

加藤：そのザーメン返しっていうのは、いつ頃、どういう経緯で生まれたんですか。

浜野：いつかっていうと、桜樹ルイ（註8）のときにやったから…

山崎：AV女優さんが出るようになってから。AVで口内発射が流行っていたので、それを逆転させたのだと思う。

浜野：そうだね。やっぱりピンク映画って、この川奈まり子もそうだけれども、主役をAVから持ってくる人が多いんですよ。

脇はもうきちんと芝居のできる、今日もあと二人は佐々木基子（註9）さんと風間今日子（註10）っていうんですけども、ピンク映画の中でしっかり芝居もできて、脇を守って映画を成立させてくれるような女優さんたち。川奈さんは別に下手では

なかったけれども、AVから来る人はやっぱりきちんとした芝居ができない。でもその代わり、すごく根性があるっていうのかな。

だから、後でAV研究家の方もいらっしゃるみたいなんですけど（笑）、私はやっぱりAVの女優さんたちがピンク映画に出てくれるようになって、私の撮りたい女の性を女の手に取り戻すという撮り方ができるようになったと思うんですね。

だからAV問題（註11）とかいろいろあったけれども、私の映画に出てくれているAV女優さんたちは、本当にきちんと自分自身の立場を決めて、自分の責任でAVに出るんだという。

だからAV全盛期の第一次淫乱ブーム（註12）なんていうのがAVにあったんだけど、その当時〔私の作品に〕出演してくれた豊丸さん（註13）は、ものすごい迫力で絡み、喘いでくれたんだけど、私になんかね、やっぱり女同士だから、「いや、そりゃ監督ね、AVは怖いですよ。みんな男の監督たちが、私のあそこに大根でもすりこぎでも突っ込んでくる。それは怖いけれども、でも私はプロのAV女優だから、何を突っ込まれてもやってみせる」っていうんですよ。

そういう人もいたし、あともう一人、貝満ひとみ（註14）っていう、「ワニとファックした女」っていうキャッチフレーズで出てきたAV女優さんがいるんですけども、彼女は、私の映画でも亀や蛸との絡みをやってもらったんですけども（笑）、控室で必ずこうやって自分のあそこを覗いて、こうやってお手入れしてるのね。

それで私が、「なんで年がら年中そんなこ手入れしてるの。もう今日絡み終わっただよ」って言ったら、そしたら「いや監督ね、私にとってここが私の顔なんです。だから、いつ誰に見られてもいいように、綺麗に手入れしてるんです」って。

そういうね、聞くと私の心にストンと、ズシンと落ちるような覚悟を持ってAVに出ている女優さんたちがすごく多かったんですね。今はわかんないんですよ、私の映画に出てもらった人はね。

だからそういう人たちと一緒に、私はある意味シスターフッドで、ピンク映画を撮り続けてくることができたな、っていうふうには思いますね。

加藤：わかりました。次の質問に移らせていただいてもいいですか。山崎さんと浜野監督の出会いというか、タッグを組むようになった経緯みたいなのを伺いたいですけど。山崎さんはもともと風俗ライターっていう経歴があるっていうふうに監督

の本〔『女になれない職業 いかにして300本超の映画を監督・制作したか。』〕で読んでんですけど、どういうふうに出会ったんですか。

山崎：風俗ライターやエロ劇画の編集をやってたんですが、一方で専門学校の講師もやっていて、その時の学生の一人が、ディレクターズ・カンパニーのシナリオコンクールに応募して、最終の五人の一人に残ったんだけど、映画化はされなかった。僕はその脚本を読んで面白かったんで、浜野監督が当時やっていたスナックに持ち込んで相談した。そしたら、これでピンク映画を作ろうということになって、その学生のシナリオを直したのが一番最初ですね。

浜野：こういう脚本があるんだけど映画になるだろうかって相談されて、私「大丈夫だよ、ピンクだったら何だってなるよ」って言って。脚本を読んだら、これが男の子たちのプロレスの話なんだよね（笑）。〔一同笑う〕それで相談して、セコンドの役を女性にして、なんとか成立させた。それが結構評判が良くて、ピンク映画の制作会社を作ろうかっていうことで、最初は二人で組んでたんだよね。

加藤：もともと山崎さんはフェミニズム的なことに関心があったんですか。

山崎：初期の上野千鶴子さんや亡くなった宮迫千鶴さんの影響はあったと思います。たまたま浜野監督が女性監督で、ピンク映画をやることになった。男性監督だったら一緒にやってなかったと思うんですよ。女性監督のピンク映画で男性批判をやるっていうのは面白くて、いろいろやってきたようなところもありますけどね。

浜野：私は別に自分でいわゆるアカデミックなフェミニズムとか学んだこともないし。ただ本当に、私が助監督やった1960年代終わりはもうピンク映画界めちゃくちゃだったんですよ。男ばっかしでさ。そういうところに若い、二十歳の女の子が飛び込むわけじゃないですか。

だから本当、もうおもちゃみたいなもんなのね、現場にしてみれば。だから港雄一（註15）っていう男優なんかいるんだけどさ、「おい、女の助監督、おいっ」って呼ぶから「なんですか」って行ったらいきなり浴衣開いてさ、そうすると勃起したチンチンがあったりさ（笑）。

夜になるとさ、みんな酒盛りするわけですよ。で、酔っ払った制作部かなんかがさ、私が布団部屋で寝てると、襲いかかってくるわけ。だから包丁をさ、枕の下に隠してね。きらっと包丁ふり回して追っ払ったりさ（笑）そういうところから始まるから、フェミニズムもなにもないわけ。そういうところで自分を守って、決してぶれずに、とにかく監督になるまで私はこの道を歩くって決めてやってきたん

ですけど。そういう私を知って、「監督がやってきたことはフェミニズムなんだよ」と理論づけてくれたのが彼なんですよ。

私も別に今だって、フェミニズムっちゃフェミニズムかもしれないけど、上野千鶴子みたいなんじゃないくて、本当に泥沼のなかのフェミニストって言われればそりゃそうだろうなとは思いますが（笑）。

加藤：ありがとうございます。浜野監督に、今回作品選定の相談もお電話でしていたんですけど、その際に、できるだけ最新作、新作に近いものを上映してほしいというふうに言われていて。浜野監督からすすめられたなかには、『黒い過去帳 私を責めないで』（註16）っていうAV出演を強要された女優が成功した後によすられる作品がありました。それで「何ですか」と聞くと、「自分の中で価値観とかも変わってきてるから」というふうに答えられたと思うんですね。

それで、監督をやっていくなかで、フェミニズム観というか、女性に対するものの考え方が変わってきたなと思うこととか、あったりしましたか。

浜野：いや、それは全然ないですね。だけど、やっぱり作品を作るときは、そのとき何が一番自分にとって興味があるか、何を撮りたいかを考えるわけですよ。

私はよく「10年前の傑作より今の駄作」というんですけど、そちらの方がやっぱり私にとっては、今の自分を反映してるものだと思うんですね。

ただ今回の『牝猫義母』の家父長制に機関銃をぶっ放すようなテーマも同じなんですよ。ほかに例えばさ、新東宝の作品の中で、これはもう20年、25年ぐらい前の作品なんだけれども、「やりたい人妻たち」（註17）っていうシリーズみたいなのがあって。それを撮ったときなんかは、例えば妻が寝てて、酔っ払って帰ってきた夫が、寝てる女房に欲情してやろうとするわけね。そしたら女房の方が、「いやもうやめて、やりたくない」と言ったら、「お前俺の女房だろ。亭主がやりたいときにやらせるのが女房だ」と言うんですよ。

で、妻が怒っちゃってさ、家中のお金をかっ払ってさ、「私はこれから気持ち良いセックスしかしない」と宣言してさ、出ていくわけ。

それであっちこっちでやりまくるんだけど、その妻はね。旦那の方が妻を探しに行き、渋谷で妻を見つけるわけ。で、そのとき旦那が妻に向かって言った言葉が、「許してやるから帰ろう」と言うんですよ。そしたら妻の方は、「アンタ何もわ

かってない」って言って、離婚届を叩きつけて、渋谷の街を颯爽と歩いていくって
いう、そういう映画とかね。

なんかそういうことっていうのは、今の女の人たちにもやっぱり見てもらいたいな
って思うんですね。だから妻であろうが、母であろうが、「私は私」という生き方
もそうだし、セックスもしてもらいたいなっていう気持ちは込めていますね。

ですから、私がそういう映画をいくら撮っても、男性観客だけだったらつまらない
わけですよ。女性にも見てもらいたいわけね。「セックスってこんなに自由なん
だ」って。セックスは男女共同参画だってよく言うんですけど、そういうものを見
てもらいたい。

それがなかなか届かなかったので、「女性だけで見るピンクツアー」（註18）って
いうのを20年前に初めて、それで何回か女性に見てもらったりもしてます。

加藤：ありがとうございます。いろいろお聞きしたいんですけど、ちょっとお時間が迫っ
てきているので、最後に監督の新作についてのお話をさせていただきたいと思いま
す。今度浜野さんの監督、山崎さんの脚本で、『金子文子 何が私をこうさせた
か』（註19）という作品が上映されます。京都ではまだだと思うんですけど。

浜野：3月13日から京都シネマで上映されます。私は3月15日の日曜日に舞台挨拶に行き
ます。

これは「100年前の反逆者」というサブタイトルがついてるんですけど、100年前
に本当に実在した金子文子という無政府主義者の……ちょっと説明してください。

山崎：もともと虚無主義者っていうことで、人類絶滅みたいなことを訴えた人なんですけ
ど、最終的にはアナーキズムに戻ったというか、アナキストとして死ぬ人です。実
際はやってないんだけど、関東大震災で朝鮮人の虐殺があった際に、皇太子に爆
弾を投げつけようとしたために、パートナーの朴烈と一緒に大逆罪で死刑判決を受
けます。ですが元々容疑事実がほとんどないので、すぐ恩赦になって無期になるん
ですが、朴烈の方は日本が敗戦するまで刑務所の中にいた一方で、金子文子は3ヶ月
……121日か。自分の独房で首をつって死んじゃうんですね。

死ぬ直前に、大審院から女子刑務所に送られて死ぬまでに何があったかっていうの
は、全く知られていなかったもので、それをテーマにして作った作品ですよ。

浜野：「ふざけんな」って言って、恩赦状をビリビリ破り捨てるんですよ。

その恩赦を拒否して自死するまでの最後の121日間に何があったのか、なぜ金子文子は死んだのかっていうことを描いている作品ですので、よろしければ3月13日から2週間、京都シネマでやりますので、ぜひ見てください。

この金子文子の生き方も、今の若い人たちにぜひぜひ知ってもらいたい。そして考えてもらいたい作品になってると思います。

加藤：ありがとうございます。ぜひ皆さんも京都シネマでも何でも行ってみてください。

それでは、お時間ですのでこれで終わりにさせていただきます。お二方ありがとうございました。

註

- 1) ウーマンリブ：詳細は菅野優香氏のトークの註を参照。
- 2) 田中美津：同上。
- 3) 四天王、七福神：ディスカッションの註で詳述。
- 4) 川奈まり子：『川奈まり子 牝猫義母』の作品紹介を参照。
- 5) 『和服姉妹 愛液かきまわす』（2011）：浜野佐知監督、山崎邦紀脚本による旦々舎制作のピンク映画。
- 6) 国分二郎：70-80年代にかけて活躍したピンク映画俳優。特に渡辺護、梅沢薫両監督作品に多数出演した。主な出演作に、渡辺護監督作品『男ごろし 極悪弁天』（1969）、梅沢薫監督作品『女教師(秘)教えてあげる』（1979）がある。なお、浜野監督の初監督作品は、『十七歳、すきすき族』（1972）。
- 7) なかみつせいじ：浜野組の常連俳優で、ピンク映画界を代表する男優。『川奈まり子 牝猫義母』で長男を演じたほか、『色道四十八手 たからぶね』ではヒロインの不倫相手を演じている。
- 8) 桜樹ルイ：90年代前半に一世を風靡したAV女優。浜野監督作品では、『桜木ルイ ぐしょ濡れ下半身』（1992年、エクセス）に出演。浜野監督作品で桜樹ルイ出演の劇場公開作品は1本。他はビデオ。

- 9) 佐々木基子：浜野組の常連女優。『川奈まり子 牝猫義母』では、長男の妻を演じている。
- 10) 風間今日子：浜野組の常連女優。『川奈まり子 牝猫義母』では、次男の妻を演じている。
- 11) AV問題：AV出演強要問題のこと。AV業界では、出演の強制や、出演を決めた女性に対しても、何を行うか説明しないまま、拷問に近い過激な撮影をすることがしばしばあった。こうした女性に対する人権侵害が社会問題となり、2010年代以降、人権団体「ヒューマンライツ・ナウ」や知的財産振興協会（IPPA）、一般社団法人表現者ネットワーク（AVAN）などが立法や行政と提携しながら、問題解決に取り組んでいる。安田理央『日本AV全史』、ケンエレブックス、2023年。
- 12) 第1次淫乱ブーム：1988年に起こり、豊丸や沙也加、千代君、亜里沙といったAV女優を輩出した。浜野佐知『女になれない職業 いかにして300本超の映画を監督・制作したか。』、ころから、2022年、61頁。また、村西とおる監督、黒木香主演作品の『SMぼいの好き』（1986）をきっかけに、1980年代後半は激しく能動的に性交する女性像が〈淫乱〉（のちに〈痴女〉に置き換わる）として流行していた。小田視希「欲望と反省のペルソナー AV監督・二村ヒトシが体現する「あたらしい男性性」」、『芸術文化講座論集』、第二号、2025年、11-12頁。
- 13) 豊丸：1988-90年にかけて活動し、淫乱ブームの中心的存在だった。浜野監督作品では、『豊丸の変態クリニック』（1988）で主演。
- 14) 貝満ひとみ：同じく第一次淫乱ブームで活躍したAV女優。浜野監督作品には、『貝満ひとみ 何でもいらっしゃい！』（1991）、『変態姉妹 亭主交換』（1993）がある。
- 15) 港雄一：「レイプマン」、^{おかしや}「犯し屋」の異名を持つ、ピンク映画を中心に活躍した俳優。主な出演作に『荒野のダッチワイフ』（1967、大和屋竺）、『新人OL 部長のいたずら』（1999、小林悟）。そのほか数多くの作品に出演している。
- 16) 『黒い過去帳 私を責めないで』（2017）：現状、最後に撮られた浜野監督のピンク映画。若き小説家として名を馳せた主人公が、AV出演の過去をゆすられるが、最終的に自分の過去を受け入れる。主演は卯水咲流。
- 17) 「やりたい人妻たち」シリーズ：旦々舎制作の『やりたい人妻たち』（2003）、『やりたい人妻たち2・昇天テクニック』（2003）のこと。

- 18) 女性だけで見るピンクツアー：「暴走女子と行く！ピンクツアー」のこと。このツアーは、女性で企画運営し、女性が安心して参加できるという趣旨のものである。2012年の上野オークラ劇場を皮切りに、2019年までに20回行われている。浜野佐知『女になれない職業 いかにして300本超の映画を監督・制作したか。』、ころから、2022年。
- 19) 『金子文子 何が私をこうさせたか』(2026)：浜野監督・山崎氏脚本の旦々舎による一般映画。23歳で獄中自殺した日本のアナキスト・金子文子の獄中での121日間を辿る。